

共生・公正・創造



# ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合  
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号  
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290  
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

【虚構からの訣別を図るべき時期に到達したJR東日本！ シリーズ11】

## したたかな大塚人事！ その

・・・この際の一連の人事は、「住田・大塚」ラインで行われたと言われている。また、これによって「松田・松崎・花崎」派は“一掃的打撃”を受けたと見る向きもあるようである。初代住田社長は国鉄改革、JR発足関連で何冊もの本を書き、その中で、松崎氏との蜜月、相互信頼の深さを誇示した記述を残しているが、最近では周辺に「『JR東日本革マル問題』が単なる“疑惑”でなく“真実”だったとは、下からの報告になかった」と弁解めいた不満を漏らしている、との情報が流れている。もしこれが事実だとしても、住田氏はトップとしての不明を恥じるべきであろう。二代松田社長は『なせばなる民営化、JR東日本』（生産性出版）以外、著書は見当たらないが、言行録としては、「松崎礼讃」、「箱根以西JR各社の首脳と労政への批判」、「財界団体首脳や労働委員会への批判や悪口」など、一流大企業のトップの言としては首を傾げる内容のものが多数残っている。

ところが、現大塚社長にあってはそれらのたくいが見事なほどに一切ない。これは単に、慎重居士、用心深い性格などの言葉で評すべきでなく、同氏の本質は、「用意周到」であり「したたかさ」にあるというのが筆者の診立てである。それは特に「人事」に現れていると思うので、以下にその実例のごく一部を述べてみたい。

松崎・本部派と福原・嶋田派との内部確執関連で、当初、JR東労組新潟地本と長野地本は福原・嶋田派、その他の地本は松崎・本部派に一応色分けされた。・・・さて、当該支社の一つで、抗争に敗れて本部及び地本役員の地位を失った福原・嶋田派の者たちが元職場に復帰したところ、本部の強力な助勢によって奪権に成功した地本役員は嵩にかかって、「組織破壊者たちを元職場に置かず、関連会社に出向させろ」と支社に対して要求してきた。ところがこの報告を受けた支社長は、「正当な理由がない。出向させることはできない。組合がそんなことで列車を止めるというのなら、列車が止まっても仕方がない。いざとなったら、支社長の自分が責任をとる」と逡巡する部下を激励、頑として要求に応じなかった。松崎・本部派で固まった地本役員は極めて不満で、あれこれ手段を尽くしたが、支社長の一步も譲らない姿勢の前にどうすることもできず、遂に要求を諦めざるを得なかった。この成り行きを息を詰めて見守っていた支社の中堅幹部や現場長たちは、この支社長の勇氣と決断に感激し、一夜、相当数の有志社員が上司に内密で支社管内の温泉地に秘かに集まり、祝杯を挙げ、支社長を喝采し、支社長方針の遂行に全力を挙げて取り組む決意を固めたそうである。

筆者はこの“情報”に接した時、かつての国鉄の岩盤組織、現場管理者・準管理者の「DNA」は健在、脈々と受け継がれていることを感じ、非常に嬉しかった。それだけにまた、この意外な情報を入手して以降、松崎・本部派が圧倒的優勢の中で、「スジを通した支社長の運命や如何？」に注意していたのだが、この“情報”を知らない筈がない「大塚人事」は、同支社長を本社役員に栄進させた。

《国鉄改革の完成に向けて（宗形明著）205ページ～206ページより抜粋》